

平成二十四年歌会始御製御歌及び詠進歌

岸

御製

津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる

皇后陛下御歌

帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず

皇太子殿下

朝まだき十和田湖岸におりたてばはるかに黒き八甲田見ゆ

皇太子妃殿下

春あさき林あゆめば仁田沼の岸边に群れてみづばせう咲く

文仁親王殿下

湧水の戻りし川の岸边より魚影を見つつ人ら嬉しむ

文仁親王妃紀子殿下

難き日々の思ひわかちて沿岸と内陸の人らたづさへ生くる

眞子内親王殿下

人々の想ひ託されし遷宮の大木岸にたどり着きけり

正仁親王殿下

海草は岸によせくる波にゆらぎ浮きては沈み流れ行くなり

正仁親王妃華子殿下

被災地の復興ねがひ東北の岸べに花火はじまらむとす

崇仁親王妃百合子殿下

今宵揚ぐる花火の仕度始まりぬ九頭竜川の岸の川原に

彬子女王殿下

大文字の頂に立ちて見る炎みたま送りの岸となりしか

憲仁親王妃久子殿下

福寿草ゆきまだ残る斐伊川の岸边に咲けり陽だまりの中

承子女王殿下

紅葉の美しき赤坂の菖蒲池岸边に輝く翡翠の青

典子女王殿下

対岸の山肌覆ふもみぢ葉は水面の色をあかく染めたり

絢子女王殿下

海原をすすむ和船の遠き影岸に座りてしばし眺むる

御製

津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる

この御製は、昨年五月六日、東日本大震災被災地お見舞いのため岩手県に行幸啓になった際、釜石市と宮古市の間をヘリコプターにお乗りになり、津波により大きな被害を受けた被災地を上空からご覧になったときの印象を詠まれたものである。

皇后陛下御歌

帰り来るを立ちて待てるに季ときのなく岸とふ文字を歳時記に見ず

俳句の季語を集めた歳時記に「岸」という項目はなく、そのことから、春夏秋冬季節を問わず、あちこちの岸边で誰かの帰りを待つて佇む人の姿に思いを馳せてお詠みになられた御歌。この度の津波で行方不明となった人々の家族へのお気持ちと共に、戦後の外地からの引揚げ者、シベリアの抑留者等、様々な場合の待つ人待たれる人の姿を、「岸」という御題に重ねてお詠みになっていらっしゃるようです。

皇太子殿下

朝まだき十和田湖岸におりたてばはるかに黒き八甲田見ゆ

このお歌は、皇太子殿下が、学習院中等科三年生の修学旅行で、東北地方を旅行されたおりに、早朝、十和田湖岸に降り立たれ、ほの暗い中に、黒くそびえる八甲田連峰を眺められた時のご印象をお詠みになられたものです。

皇太子妃殿下

春あさき林あゆめば仁田沼の岸边に群れてみづばせう咲く

平成八年四月下旬、両殿下は福島県土湯温泉町をお訪ねになりました。

春浅い信夫路しのぶじのハイキングコースを散策なさった折に、芽吹き間近の樹林が開けて仁田沼に出られるとそこには白い包状の花が美しい十万本のみずばしよの群落が広がり七分咲きの見ごろを迎えておりました。その時の光景をお詠みになられたものです。

昨年しんねんの東日本大震災による被害に心を痛められ、被災地の人々や福島県の美しい自然にも思いを馳せられてお詠みになりました。

文仁親王殿下

湧水ゆうすいの戻りし川の岸边より魚影ぎよえいを見つつ人ら嬉しむ

昨年三月十一日の東日本大震災後、栃木県内にある川の湧水が枯渇し、そこに棲息しているイトヨ（トゲウオの仲間）やホトケドジョウなどの稀少な淡水魚に大きな被害がありました。幸いなことに、数ヶ月後に湧水が戻り、イトヨをはじめとする魚たちは生き延びることができました。

秋篠宮殿下は、昨年十一月初旬にその場所をご視察になり、魚を確認されました。近くにある小学校の児童が魚の観察を継続しており、川周辺の人々も喜んでのことだろうと思われ、このお歌をお詠みになりました。

文仁親王妃紀子殿下

難^{かた}き日々の思ひわかちて沿岸と内陸の人らたづさへ生くる

秋篠宮同妃両殿下は、昨年三月十一日の東日本大震災後、各地の避難所や被災地をご訪問になり、被災された人々や、現地での様々な活動をおこなっている人々にお会いになりました。また、復興への取組や支援活動を続けている関係者などからも、活動状況や現地の様子をお聞きになっておられます。

秋篠宮妃殿下は、震災後の厳しい状況の下で、沿岸部と内陸部の人々が、様々な思いをもって支え合いながら生きる姿に心を寄せられ、このお歌をお詠みになりました。

眞子内親王殿下

人々の想ひ託されし遷宮の大木岸^{たいぼく}にたどり着きけり

昨年十月にご成年を迎えられた眞子内親王殿下は、翌十一月に神宮へご参拝になりました。また、二〇〇六年七月には、秋篠宮殿下とご一緒に、神宮ご参拝に併せて式年遷宮行事の一環である御木曳（川曳）をご視察になり、造営されるお社の材となる大木が大勢の人々によって川の中を曳かれ、岸にたどり着く様子をご覧になりました。

眞子内親王殿下は、この度の神宮ご参拝の折り、五年前にご覧になった御木曳の光景を想い出され、二十年に一度の遷宮への多くの人々の気持ちに思いを馳せながらこのお歌をお詠みになりました。

正仁親王殿下

海草は岸によせくる波にゆらぎ浮きては沈み流れ行くなり

正仁親王妃華子殿下

被災地の復興ねがひ東北の岸べに花火はじまらむとす

震災復興を願って東北の夏祭りは例年どおり行われることを
お知りになり、青森湾の岸辺から花火をご覧になった際の風景
をお詠みになったものです。

崇仁親王妃百合子殿下

今宵揚ぐる花火の仕度始まりぬ九頭竜川の岸の川原に

福井県にお成りになられた際、九頭竜川のほとりで今晚打ち
上げる花火の用意をしている様子をご覧になり、それを思い出
されお詠みになったものです。

彬子女王殿下

大文字の頂に立ちて見る炎みたま送りの岸となりしか

昨年八月、京都五山送り火の際に大文字山の山頂に登られ、
目の前で燃える火柱をご覧になりながら、東日本大震災で犠牲
になられた方々の御霊のことを思われお詠みになったものです。

憲仁親王妃久子殿下

福寿草ゆきまだ残る斐伊川の岸边に咲けり陽だまりの中

雪の中、斐伊川の岸边に咲く福寿草をご覧になり、春の兆しを感じられたことを詠まれたものです。

承子女王殿下

紅葉の美^はしき赤坂の菖蒲池岸边に輝く翡翠^{かはせみ}の青

紅葉で真っ赤になっている、赤坂御用地内にある菖蒲池の岸にとまっていた翡翠^{かはせみ}をご覧になり、その姿がとても印象的に感じられたことを詠まれたものです。

典子女王殿下

対岸の山肌覆ふもみぢ葉は水面の色をあかく染めたり

対岸の山肌を覆う紅葉をご覧になったことを詠まれたものです。

絢子女王殿下

海原をすすむ和船の遠き影岸に座りてしばし眺むる

学習院の沼津臨海学校を助手として訪れられた際、目にする光景がまるで時代をさかのぼったかのように感じられたことを詠まれたものです。

召人 堤 清二

雲浮ぶ波音高き岸の辺に董咲くなり春を迎へて

選者 岡井 隆

いのちありてふたたびドナウ源流の岸べをゆきし旅をしぞ思ふ

選者 篠 弘

かはらざりし北上川に花びらが岸のほとりの早瀬を走る

選者 三枝昂之

なほ朽ちぬこころざしありふるさとの岸边に灯る甲州百目

選者 永田和宏

舫ひ解けて静かに岸を離れゆく舟あり人に恋ひつつあれば

選者 内藤 明

源は雲立てる山ゆつくりと流るる川の岸边をあゆむ

選 歌 (詠進者生年月日順)

茨城県 寺門龍一

いわきより北へと向かふ日を待ちて常磐線は海岸を行く

埼玉県 佐藤洋子

対岸の街の明かりのほの見えて隠岐の入り江の静かなる夜

奈良県 山崎孝次郎

相馬市の海岸近くの避難所に吾子あるを知り三日眠れず

長野県 小林勝人

ほのぼのと河岸段丘に朝日さしメガソーラーはかがやき始む

大阪府 山地あい子

しほとんば追うて岸边をかける子らつついつついと空はさびしい

千葉県 宮野俊洋

春浅き海岸に咲く菜の花を介護のバスが一回りせり

カンボジア国
プノンペン都

渡邊榮樹

子らは浴み岸边に牛が草を食むこそぞの我らが地雷処理跡

京都府 大石悦子

とび石の亀の甲羅を踏みわたる対岸にながく夫を待たせて

福島県 澤邊裕木子

巻き戻すことのできない現実がずつしり重き海岸通り

大阪府 伊藤可奈

岸边から手を振る君に振りかへすけれど夕日で君がみえない

佳 作 (詠進者生年月日順)

大阪府 和田幸一

川上に雪の残れる山見えて岸边にひろく友禅を干す

長崎県 井元静夫

声高なこゑならとどく向かふ岸肥前と筑後が訛つて話す

山口県 齊藤 定

川岸の茂みにゴーグル忘れられ子らの短き夏は終はりぬ

兵庫県 石田基慶

揖保川の土手一面に菜の花の向かふ岸まで映ゆる明るさ

徳島県 福富久枝

ひたすらに母につき来しかるがもの岸より入りて己が水脈ひく

滋賀県 桐畑福美
産卵を終へし公魚岸に寄り黒きうねりとなりて過ぎゆく

兵庫県 宮千地孝夫
街川に子らの元気な叫び声岸に脱ぎたる大小の靴

秋田県 小林絢子
復興を願ふ花火が次々と爆^はぜて対岸の闇を照らせり

千葉県 中根圭美
ユーラシアの西の果たての切り岸に追ひつめられて来しにあらねど

東京都 吉井守正
切り岸の地層をつぶさに調べつつ道なき沢を尾根まで詰める

新潟県 宮澤房良
信濃川の岸へ次次ダンプカー来ては捨てゆく町中の雪

岩手県 藤原建一
大津浪に負けずにきつと戻り来る鼻曲り鮭は岸まで埋めて

茨城県 青野清一
利根川を上がる白子を掬ひ取るアセチレン灯岸边に置いて

兵庫県 平林宏子
鴨川の岸に寄り添ふ若人に交じりて坐りませんかあなた

徳島県 木内照代
自販機のおかりを消して川岸に最初にともる蛍火を待つ

茨城県 榎本麻央
社会科の授業で習ふリアス式海岸子らは指でたどりぬ

兵庫県 小谷 隆
君が待つ向かふ岸まであと少しあと少しだけ近づきたくて

東京都 谷川紅緒

君の名を呼ぶ息だけは凍らずに岸辺を照らす冬のオリオン

福岡県 田中順子

海岸で風を感じて立つてゐるそこから僕は歩み始める